

都留文科大学 地域交流研究センター機関誌
『フィールド・ノート』 no. 101 Jul. 2019

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 101 Jul.



特集

いろどる

この春、広がった世界

私が見つけた春の色

癒しのお寺に咲くヤマブキソウ

鳥の色彩

いろ撮る

かたちが変わるとき



まちを歩いているときに会ったお庭です。梅雨の湿った空気のなかで咲く花たちは、より鮮やかにうつります(上谷：2019年6月12日)



表紙の写真(撮影：北垣憲仁)

こんなに美しい蝶が身近にいるのかとつい見とれてしまいました。4枚の翅にクジャクの飾り羽のような大きな目玉模様のあるクジャクチョウ。都留では4月から9月にかけて森の周辺や草原などで見かけます(本学キャンパス：2009年6月17日)

FIELD・NOTE

no.101 Jul.

CONTENTS

特集 / いろいろ

- 08 この春、広がった世界
- 10 私が見つけた春の色
- 13 癒しのお寺に咲くヤマブキソウ
- 16 鳥の色彩
- 18 いろ撮る
- 20 かたちが変わるとき
-
- 26 桜の祠の記憶を辿る
- 29 センサーカメラが写した動物たち
- 30 ふるもの古物たちへの眼差し
- 35 養蚕業をつづける 後編
～技術を絶やさぬよう走り続ける機関車～
- 38 ムササビ観察日記
- 40 新しいふるさととの出会い
- 41 都留の水がくれたもの
- 42 都留の風景写真集－薫風の候－
- 44 フィールド暦

－『フィールド・ノート』とは－

『フィールド・ノート』は「都留を観察し、記録し、学び合う」をテーマに2002年に創刊されました。本学の学生がみずから地域に出て自然や人びとの暮らしなどを取材し、編集・発行しています。



FIELD・MAP



山梨県 都留市

面積 161,63km²

総人口 30,311人(2019年5月現在)

足もとの水路には富士山の湧き水が流れ、身近な森ではムササビとの出会いが楽しめます。山梨県都留市は、自然と人の暮らしを近くに感じることができる地域です。

特集で取り上げた生きものたち



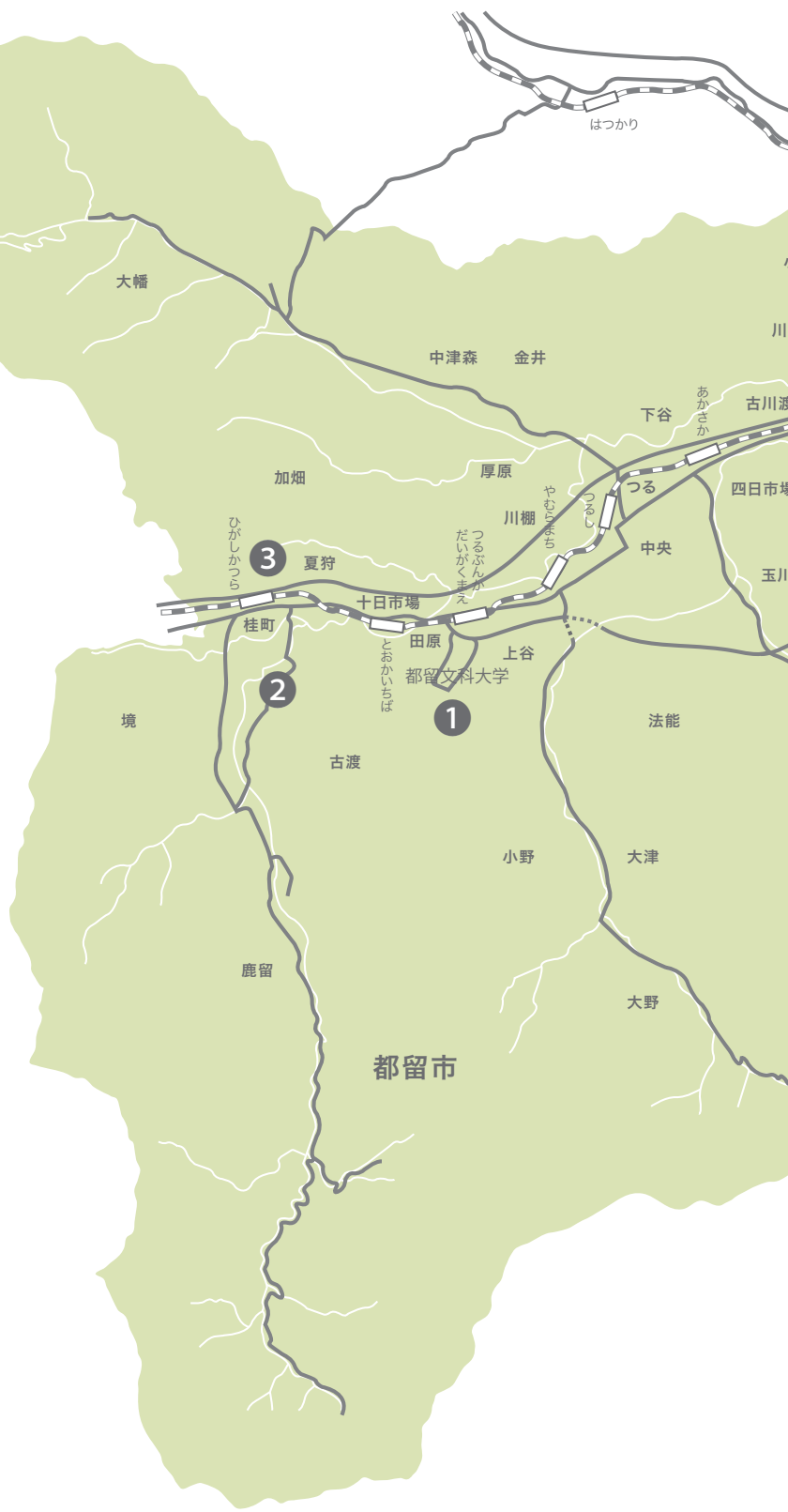
左上/メジロ(本学うら山) p.8-9

右上/スミレ(本学うら山) p.10-11

左下/ヤマブキソウ(宝鏡寺) p.13-15

右下/ヤブツバキ(夏狩) p.20-23

0 1 km 2 km 3 km 4 km 5 km



いろいろ

春になると、あたたかな日差しのもとで

動植物がより生きいきとしてみえます。

花びらが舞う桜並木。菜の花畑をゆったり飛ぶチョウ。

目にうつるものが私たちの心をはずませるのは、

その鮮やかな色のためだと気づきました。

雪がとけ、木々が芽吹き、みえる景色は変わっていきます。



いま目にうつる色はこの瞬間しかみられない。

そう思うと、もっと近づいて観たくなりました。

色をとおして生きものに会うことでみえた世界。

このことを、目にうつる鮮やかな色とともに記録したい。

さっそく私たちは都留のまちを歩いてみました。



(2019年4月4日)

この春、広がった世界

メジロという鳥を初めて見た。絵の具や色鉛筆一色では簡単に表せないような渋みのある体の色に目が留まる。私はそんなメジロのようすが気になり、姿を追ってみることにした。

あの色に魅かれて

4月4日、優しい春の陽気につられ、都留市総合運動公園のまわりを歩いた。桜並木に足を踏み入れると鳥の鳴き声はいつそう近くに聞こえる。イヤフォンを使い自分だけの世界で聞く音楽とは違い、自然のなかに響き渡る鳥たちのさえずりはこの場で誰かと共有したくなる音だった。

そのとき、桜の枝のあいだを飛びまわる小柄な鳥を見つけた。割り箸一膳くらいの枝に、ちょこんと身をおく。カメラのファインダー越しにのぞいてみると、抹茶色の体に目のまわりを白い絵の具できれいに縁取ったような鳥の姿があった。メジロだ。派手すぎないその色を見てみると、自然と心が落ち着く。桜のピンク色とくつきりとした空の青に負けないくらい、鮮やかで目立っている。メジロの色にうっとり浸っていると、花粉症の私は鼻がむずむずしてきた。我慢できず大きなくしゃみが出てしまう。メジロは、羽をばたつかせて飛んでいってしまった。

メジロの行動が気になる私は、もう一度現れるのを待つ。今度こそ自然と一体となつて

静かに身を忍ばせよう。すると向かいの山から2羽ほどやってきた。桜の花の真んなかを小さくちばしでつつき、蜜を吸っているようだ。さらにもう1羽飛んできて、今度は体を逆さにしながら蜜を吸い始める。器用に枝につかまり自分の体重を支えながら必死に吸う姿に見入ってしまう。そのようすを写真におさめようとカメラの準備を始める。カメラを構えるところまではよかったが、今度はカメラを起動するときのシャランという音で逃まうのだろう。お腹を空かせているメジロにとっては大きな迷惑にちがいない。自然なかで動物に気づかれないよう身をひそめるのは難しい。そう考えていると、反対の山で「ホーホケキョ」とウグイスが鳴く声が聞こえた。

メジロ色とウグイス色

散歩から帰ってきた私は、カメラのメモリーに保存したメジロを見ながら、その色にまた惹かれた。メジロの色は、ウグイス色と勘違いをされることが多いようだ。凶鑑にのっているウグイスと私が撮ったメジロの写

真を並べてみる。ウグイスはくすんだ黄緑色。メジロはそれよりも明るい黄緑色だ。和菓子などにも、ウグイスという名のついた明るい黄緑色をしたものが少なくない。メジロとウグイスが間違われるわけが、もしかすると色に関係しているかもしれないということを知ると、今度はウグイスの姿をこの目で見たくなった。

メジロから広がる出会い

4月15日、17時ごろ、前回の桜並木に行ってみると花はすでに散り始めていた。桜の木々が満開の花を見せてくれる瞬間はあつというまだと今さらながらに気がつく。並木道の下でメジロの姿を探すが見当たらない。大学に帰る途中、電線に鳥が留まっていた。すぐに双眼鏡を自分の目線まで持ち上げる。

「あつ、メジロだー」。これまで遠くの木々のなかにいたメジロがすぐそばにいたので驚いて思わず声が出てしまった。メジロは足を右に擦り寄せてキョロキョロとまわりを見渡すと、本学のほうへ飛んでいった。その日やっと思つたが、たつた数秒で去ってしまった。木々が緑に色づいてきた5月7日の朝。大

学のまわりを歩く。歩き始めて5分も経たないうちにメジロを見つけた、と思いきやその鳥の体はメジロよりもっと明るい黄色で目から後頭部にかけて白い線が入っている。キレキレイという名の鳥のようだ。きつとメジロを観察していなければ、このとき私はキレキレイという鳥を認識できなかっただろう。メジロは私に、ほかの生きものと出会うチャンスを与えてくれた。

メジロの動きを一コマ一コマ切り取つてみると、同じようにうつるものはない。これは生きものを観察するうえで当たり前のことであるかもしれないが、その一瞬を夢中で追いつながら変化を見つけることに楽しさを感じた。また、メジロを追った先には、ウグイスやキレキレイといった生きものとの出会いがあった。色という小さなきっかけから始まったこの観察は、いつのまにか私の自然を見る目を広げる時間になっていた。

風間悠花（地域社会学科2年）|| 文・写真

私が見つけた春の色

スマイレは春に咲く花だ。この春、本学のうら山でスマイレを見たことで、私はいろいろな色のスマイレがあることを知った。スマイレといえば、あざい堇色の小さな花。そう思っていた私は驚き、もつとたくさんのスマイレを見つけてみたくなった。

薄紫色のスマイレ

4月4日、本学のうら山へ続く、まだ満開ではない桜が咲く道を歩いていた。落ちていく桜の花びらを目で追っていると、道端に小さな薄紫色の花が咲いているのに気づく。近づくとその色がスマイレの花と分かった。しゃがみ込んで見ていると、一つ疑問が浮かんだ。私にとってスマイレの色といえは夜に溶け込むような深い紫の堇色。しかし今日目の前にあるものは、白い絵の具にほんの少し紫色をまぜたような淡い色。私が想像する色とは違うけれど、こんな色のスマイレも控えめでかわいらしい。茎は地面に沿って伸びていて、その花の色とあいまって花全体がまわりの目から隠

れたがつているように思えた。

先ほどのスマイレを图鉴で調べてみた。これはイブキスマイレという種類ではないだろうか。優しい色で、私の親指ほどの葉っぱはハートのような形をしている。また、图鉴を見たことでスマイレには多くの種類があることを知った。全部で四百種以上、日本では約二百種以上が見られるようだ。そのなかにはまさに堇色というものもあるし、違うものもある。薄紫、白、青みがあったもの、なかには黄色のスマイレまであった。こんなにたくさんの色があるのに、どうして深い紫色の名前に使ったのだろう。色鮮やかな写真を眺めていると、スマイレの色を一色に決めてしまうのはもったいない気がした。

濃紫色のスマイレ

4月9日、この日も同じ道を歩く。あたりを見渡すと、この前は道端にひっそりと数輪だけ見えていた薄紫色が、前よりもよく目に飛びこんできた。山の斜面には広く転々とスマイレの花を見ることができている。どうやら私がこのあいだ見つけたイブキスマイレのようだ。そこからまたうら山のほうへ歩を進めると、この前は見なかったスマイレを見つけた。あまりに目立つ紫で、数メートル離れた場所からも咲いているのが分かった。日差しが当たることで陰ができ、それがより紫を濃くしている。茎は上に向かってピンとまっすぐ伸びており、葉っぱは細長くて先が尖っていた。イ





4月4日

天気: ☀

- ・淡い紫色
- ・ハート型の葉っぱ
- ・控えめでかわいらしいようす

4月9日

天気: ☀

- ・鮮やかな濃い紫色
- ・まっすぐな細長い葉っぱ
- ・堂々としていて気高いようす



4月20日

天気: ☁

- ・澄んだ白色
- ・平らで大きな葉っぱ
- ・小さくて可憐なようす

ブキスミレを奥ゆかしいかわいらしさというなら、このスミレは堂々とした美しさだろう。花自体は決して大きくない。しかしその鮮やかな立ち姿は、近くで見ると花自体の小ささをまったく感じさせなかった。このスミレをじつさいに見たら、濃い紫を董色と決める気持ちも分かってしまう。

また図鑑を見ると、これがまさにスミレという種だと予測できた。おそらく董色はこの色を指しているのだろう。スミレの種の多くは分布する地域が限られているが、スミレは日本のほぼすべての地域に分布しているのだという。この花がスミレの名前で呼ばれ、色が董色と言われるようになったのは分布の広さが要因なのかもしれない。

白色のスミレ

ここ数日なんども図鑑を眺めていて、私ごとくに惹かれた色のスミレがあった。それは白色のスミレだ。私は見たことがなかったけれど、白いスミレにもいくつか種類があるらしい。こんなにあるなら都留市でも見られるだろう。そう期待して、4月20日のお昼過ぎに探しに行くことにした。

イブキスミレやスミレが咲いているいつもの道では見つけられず、本学のうら山に入ることにする。ただ道を歩くだけでは見つけられないことで、白いスミレを見たい気持ちがより強くなった。山のなかにはたくさんの方が生い茂っていて、その数だけたくさんの方が溢れている。歩いていて、小さな白色は目に入りにくいと感じた。私は見逃さないよう地面に目を凝らす。

歩き続けていると一輪のスミレの花を見つけた。ぼんやりしていると気づかずに踏んづけてしまいそうなほど、ひっそりと咲く白いスミレ。白いスミレのなかでもマルバスミレと思われる種だろう。イブキスミレやスミレに比べて花はひとまわり小さくて、花をより可憐に見せていた。本学のうら山にこんな花が咲いていることを、今この花を見つけた私以外誰が知っているだろう。そもそも白いスミレの存在を知らない人もいるかもしれない。そう考えるとこの白いスミレが自分だけの特別なものに思えた。ピンクがかった柔らかな薄い紫のスミレも、濡れたような濃い紫のスミレもそれぞれよさがあつたけれど、私はこの透き通るような真っ白のスミレが一番

好きだ。一色を選ぶのは難しい。それでも、私が董色を決めるとしたらこのマルバスミレの色にしていただろう。

イブキスミレ、スミレ、マルバスミレ、そのほかにもたくさんあるスミレの種。一つ、また一つと見つけることに私のなかでスミレへの印象は変わっていった。私にとって董色といえは深い紫。だからスミレもその色の印象しかなかった。でもさまざまな色のスミレを知った今では、それはもつたいたいことだったと思う。道端に咲く小さな花に日々心を動かされるなんて、今までの私の人生にはなかつたことだ。ふと思いついたときにスミレの花を探してみるだけでも、いつもより歩くのを楽しめていることに気づく。

5月中旬。もう一度うら山を歩いてみる。もうスミレの花を見ることはできなかつた。それでも私は春の初めにうら山で見たスミレをしつかり思い出すことができる。私が思い浮かべる春の色に、あの透き通る白色が加わった。

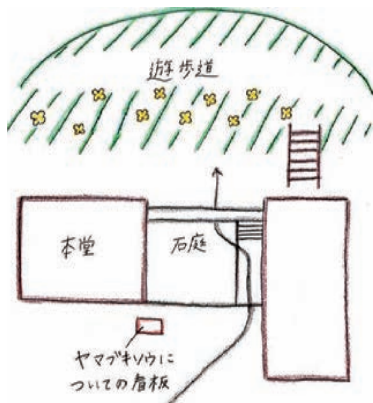
豊増華歩（国文学科2年）|| 文・写真

癒しのお寺に咲く ヤマブキソウ



(2019年5月8日)

見取り図



ししどめ 鹿留入口交差点近くにある ほうきょうじ 宝鏡寺では、山梨県の天然記念物に指定されたヤマブキソウの群生が見られる。地元のかたが「4月下旬からヤマブキソウがバアーっと咲くよ」と教えてくれた。かよっているうちに少しずつ花を咲かせ、5月の上旬には群生するヤマブキソウが一面に花を咲かせるようすを見ることができた。

ヤマブキソウは漢字で「山吹草」と書く。文字からもわかるように、草花で、低木のヤマブキに似た山吹色の花を咲かせる。山吹色とは、赤みを帯びた黄色のこと。花びらは4枚で花自体は小さく可愛らしい。

4月22日に宝鏡寺を訪れると、ところどころにヤマブキソウが咲いていた。山吹色が目立っていて、石庭を通り過ぎて足を一歩踏み入れただけで目に入る。蕾から少しだけ山吹色が見えているものもあれば、完全に顔を出すまであと少しなもの、もうすでに花を咲かせているものもある。山の斜面全体に濃い緑色をしたヤマブキソウの葉が生い茂っているので、山吹色がひときわ映えている。一面が山吹色になる景色を想像してワクワクした。

守る人



4月30日。期待に胸を弾ませて見に行く、山の斜面にはヤマブキソウがすでに咲いていて山吹色の花が山を彩っていた。一面に広がる山吹色は、目が釘付けになるほど生きいきとして明るい色。22日と比べて一気に鮮やかになった景色に、私は嬉しくなった。

その日、宝鏡寺にお住いの佐藤秀子さん

(70)に、ヤマブキソウについてお話をうかがった。秀子さんは現任職のお母さんで、15年前から宝鏡寺に住み始めた。

秀子さんがヤマブキソウを初めて見たとき、本堂の正面は真つ黄色のヤマブキソウの絨毯に見えたそう。それから階段を作ったり建物を建てたりするうちに、ヤマブキソウの群生の位置が本堂の裏側が変わった。それでも例年、山の斜面は真つ黄色になるそう。「ヤマブキソウが大好きで管理してくれるおじさんがいるの」と秀子さんはおっしゃる。そのおじさんは宝鏡寺の近くに住んでいる。ヤマブキソウの管理を始めて20年以上も経つそう。

よく宝鏡寺の敷地内で山菜摘みをするという秀子さん。ヤマブキソウの群生地は土質が脆い。そこにあるワラビを何本か取ろうとしたときに、ズズッと土ごと落ちてしまい、「だめだよ、足をかけるところが決まってるから」とおじさんにいわれたそう。また、山の上にある遊歩道から上側にはヤマブキソウは咲かないが、「おじさんが、『悔しい悔しい』って一生懸命、種を蒔くの。だけど、あの上は全然いなくて、でも1株咲いたのよ、

不思議よね」と秀子さんはおっしゃった。

「おれもそろそろ歳だから、任職に教えとかなきゃ」というのがおじさんの口癖だそう。私がヤマブキソウを見ることができるとも、鮮やかな景色に心が晴ればれするのも、見えないところで汗を流している人がいたからだ。それを知ってからヤマブキソウを見ると、「今年も咲いてよかったなあ」とほっとした気持ちになった。

今年ヤマブキソウ



この日はあいにくの雨だったので、秀子さんは「雨が降ると元気がなくなっちゃう。いつまでもつかしら」と不安そうだった。「今年ね、ヤマブキソウの花のつきがまいちな。去年と比べてね。天候の関係かな。本当は真つ黄色になるの。今週中は大丈夫だと思っけど、いつもより出てきた芽も少なかつた」とおっしゃる。「ヒトリシズカが咲き出してちよつとするとエンレイソウっていうのが咲き出すの。それが咲き出してちよつとすると山の上のほうからヤマブキソウが。一斉に咲かないのね、山の上、真んなか、一番下ってくるの。それが、全部咲き終わってイカ



蕾は先端が尖っていた(2019年4月16日)



完全に開くまであと少し(2019年4月22日)



この日は数株だけ花を咲かせていた(2019年4月22日)



宝鏡寺の入り口から見える景色(2019年5月8日)

リソウが咲いてシャガっていうのが咲くの。ずーっと何年もそれが順番だったのに今年は一斉」。天候の影響なのか、例年通りの順番で植物が咲かず、ヤマブキシソウの花のつきも悪いという。

ヤマブキシソウの開花を楽しみにしている人は多い。「みんなが去年見逃したからって、『もういいですか』ってずっと電話がくるんだけど、まだ、まだって。1回見たからとか、見た人が写真を撮って見せてくれたからとかできてくれる」と秀子さん。「待つてくれてい

る人がいるのに、今年は花つきが悪いからね」と残念そうな表情を浮かべていた。



秀子さんは宝鏡寺を『癒しのお寺』と呼ぶ。「なんか考えごととかあるときは、お寺をひとまわりしてきてつてみんなにいうね」と秀子さん。それは、ヤマブキシソウをはじめとするたくさんの植物が咲き、気持ちが悪く落ち着くような空間が広がるからだ。私もヤマブキシソウが放つ鮮やかな山吹色に癒され、宝鏡寺に

いるあいだは時間がゆつくりと進んでいるように感じた。

『癒しのお寺』で、ヤマブキシソウは守る人や見守る人に大切にされてきた。だから開花を心待ちにしたり、めずらしい群生のようすを眺めることができるのだ。開花の時期が過ぎて種子を飛ばし終わった6月中旬には、すでに草刈りが済んでいた。来年に向けての準備がもう始まっている。

宇佐美温加(社会学科3年) 文・写真

鳥の色彩

野外で見る動物のなかで、鳥類は色彩の鮮やかな種が多いグループの一つです。羽の色にはさまざまな意味合いがあり、仲間とのコミュニケーションや繁殖にかかわる行動など、生きていく上で重要なものがあります。さらに、色に由来する言葉が種名になっている種もあります。鳥類の色と生態の関係を見てみましょう。

白斑の役割

黒色や茶色など、地味な色の上に白色の部分ががあるとよく目立ちます。この白色の部分は斑点になつていくことが多く、白斑と呼ばれています。コゲラやアカゲラなどの翼や背には白斑がありますが、これらは木の幹に止まったときには見事な保護色となります。目立つはずの部分が保護色になるのは、色の組



コゲラ(2011年1月31日)

み合わせによるものです。木の幹は、まだら模様に見えたり、凹凸があつて影になつていたり、ウメノキゴケの仲間などの白っぽい菌類がついているところがあるからです。

ホオジロ類の尾羽の外側には、白斑のある種が多数います。鳥類の尾羽は、閉じているときは中央の羽が上に、外側は下に重なる構造をしています。そのため飛び立つときや、止まっているときでも少しの動きで尾羽の外側の羽の白斑が見えるようになります。白斑が見えるときは何らかの動きのあるときです。以前、ホオジロの家族群を観察しているとき、親鳥がヒナに警戒を促すようにこの白

色と種名

斑を見せているように思える場面がありました。尾羽を閉じたり開いたりして白斑を見せる行動は、仲間には危険を伝達しているのかもしれない。

瑠璃色は青色に近い色ですが、この瑠璃がつく鳥としてはオオルリ、コルリ、ルリビタキがいます。3種ともオスは頭から尾にかけて瑠璃色をしています。いっぽう、アオジやアオゲラなどは種名に「アオ」とつきますが、瑠璃色ではありません。野菜の青菜が青色ではなく緑色であるのと同様に、これらの鳥は



ルリビタキ(2011年5月23日)



左:トビ(2012年11月13日) 中央:スズメ(2011年1月31日) 右:ウグイス(2014年6月18日)

黄緑色をしています。昔は緑色も青色と表現していたためだと考えられています。

鶯色、雀茶、鶯色はそれぞれ、ウグイス、スズメ、トビの羽色からきています。ふつうに売られている鶯餅の色は、じつさいのウグイスの色とは異なります。ウグイスは緑褐色をしています。藪のなかにいることが多いため鳴き声はよく聞こえるものの姿を見る機会はほとんどありません。ウグイスを見たことのある人が少ないため、鶯餅の色を鶯色と考えるようになったのかもしれない。しかし鶯餅は、ウグイスの形に模した餅という説もあります。雀茶と鶯色はどちらもよく似た色ですが、雀茶のほうがやや明るさがあります。

濡羽色は艶のある黒色のことを指し、カラスの羽のような色ともいわれています。カラス類を近くで観察すると翼や背の羽には光沢があり、黒一色ではありません。カラス類の羽の光沢は、構造色によるものです。鳥の羽の色は色素によるものですが、カラス類の翼や背、マガモのオスの頭部、カルガモの次列風切など、光の当たる角度によって色が変わるものは、構造色と呼ばれます。羽を形



マガモ(2012年11月13日)

作る層に光が反射や屈折をすることで見える色は、構造色といえます。

色彩の意味や由来を考えながら観察するのも楽しいものです。羽色と生態の関係もわかっていないことがたくさん残されています。たとえばイワツバメは頭から尾にかけては黒色ですが、雌雄ともに腰の部分だけが白色をしています。これには、どのような役割があるのでしょうか。こうした色にかかわる疑問を調べるのも、鳥類観察の楽しみの一つです。

西教生(本学非常勤講師) 文・写真

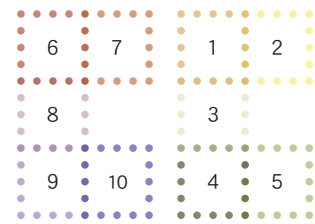


いろどる

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

春はさまざまな色にあふれています。陽気に誘われながら、色を見つけにまち歩き。都留市を「いろどる」生きものたちの色を写真に収めました。





- 1 ミツマタ (2019年4月14日)
- 2 ミズカケナの花 (2019年4月19日)
- 3 ネギの花 (葱坊主) (2019年4月22日)
- 4 カワラヒワ (2019年5月3日)
- 5 マメガキの花 (2019年5月14日)
- 6 ヤマトツジ (2019年5月1日)
- 7 ベニシジミ (2017年4月17日)
- 8 八重桜 (2019年4月9日)
- 9 ショカツサイ (2019年4月18日)
- 10 ムスカリ (2019年4月18日)



かたちが変わるとき

上夏狩のヤブツバキ

都留市指定史跡名勝天然記念物第 67 号に認定されている。樹高 8.2メートル、根回り 3.1メートル。ヤブツバキは、もともと暖かい地域に生える。寒暖差が激しい都留市でここまで成長するのは珍しいそうだ。(2019年4月8日)

花びらは並べるとグラデーションのように色味が異なり、葉は鮮やかな緑のものや、黄色味があったものがある。花や葉の色が単色でないことが、ヤブツバキを間近で観察して、触ってみることではじめてわかった。その色にひかれてヤブツバキについて調べてみると、1本の木に向きあう家族のお話を聞くことができた。

小林史佳(地域社会学科2年) 文・写真

ヤブツバキと昔話



3月6日。春のうらかな風に誘われ夏狩地区を歩いていたら、大きくしなつたヤブツバキの木を見つけた。ヤブツバキの花は鮮やかな赤色で、目が離せなくなる。ぱつと見たときにはわからなかったが、よく見ると右側は切られていた。この木はどうしてこのような姿になったのだろうか。私の頭のなかに気になることが次々とわき上がって来た。このヤブツバキのことに興味を持った私は、ヤブツバキの持ち主である藤江かね子さん(90)、娘の馬木和枝さん(62)にお話を聞かせてもらうことにした。

お宅にうかがうと部屋の1階にある大きな窓からかねさんは私を見つけて、手を振



右：ヤブツバキの幹。ひび割れがない部分を見つ
けることは難しい/左：ヤブツバキの花。花の数は
数えきれない/右下：幹のこぶのうちの一つ。
縦幅約8センチ、横幅約15センチ
(すべて2019年4月8日)



つてくださった。紫色のスカーフがよく似合
っている。リビングルームにাগり、木目調
のテーブルにお茶とお手製のお新香をだし
てくださる。そしてヤブツバキに関するノ
ートを見ながら昔話をしてくださった。

根元には古い石碑がある、との記述があつた。
気になつてお話をうかがうと、かね子さんに
は毎月28日に石碑にお供えものをする習慣が
あるのだという。これは亡くなったお姉さん
がされていたことで、今ではかね子さんがし
ているそうだ。「どういう意味でやつていた

のかはしれない(知らない)。ツバキに対し
てだか、ご先祖さんの石碑に対してだか。(姉
は)必ずやつてたね。それを私が見よう見ま
ねで、やるもんだなあと思込込んだから、やつ
てただけだね」。

この石碑は昔の藤江家のお墓だと考えら
れていて、ヤブツバキは弔いのために植えら
れたのではないかと、あとで娘の和枝さんに
教えてもらった。藤江家のある夏狩地区がつ
くられる前は家の近くにお寺もなかったた
め、家の庭に土葬していたそう。

「姉はね、家がね、ツバキとともに安定で
ね、暮らしていけるようにと(お参りを)やつ
てたと思うの。だから私も同じような気持ち
で。毎日が穏やかにね、過ごせるようにつちゆ
うことで。だから家庭は円満でした」。かね
子さんは笑顔でおっしゃる。

藤江家のヤブツバキの樹齢は、200年
以上といわれている。そのあいだ、ずっとさ
まざまな時代の人に祈られていたことを思う
と、私のすぐ横で咲いているヤブツバキが急
に、とても遠い世界を生きてきた存在のよう
に思えた。

見つめるきっかけ



「なくなつてから大事だと思つたよ。こ
んだけのツバキはね」とかね子さんはいう。
2018年の秋の彼岸すぎに枝を切り、切り
口の始末が適切ではなかつたせいか、切り口
から雑菌が入り、木の半分以上が枯れた。根
本的な原因は断定できないそう。

「そんなもの（ヤブツバキ）は手をつけな

い（手を加えない）でしょう、昔の人は。た
だ我々の代になって、自分がそれほどツバキ
に感謝つていうか、気持ちがないんだね。当
たり前に思つてたんだね。この木は昔から、
こんだけ大きくなつて、我々は当たり前に見
ていたんだね。刃物を入れるというのがいい
こととか悪いことというか、全然そんな
ことは頭になく、ただこの枝が向こうの道へ
ね、広がっちゃつたから、だから、迷惑じや



上：2年前に撮影された、枝を伐採する前のヤブツバキ（写真提供＝都
留市役所 観光課）下：枝を伐採した後のヤブツバキ。枝が倒れないよう
に、ワイヤーで固定されている（2019年5月24日）

ないかなあ、つて植木屋さんに頼んで切つて
いただいたのが大きな失敗なの」。こんだけ
のヤブツバキ、というときに大きく手をいっ
ぱいに広げながらかね子さんはいう。娘の和
枝さんも、「生まれたときからあるのが当た
り前だったから、特別な価値があるつていう
感覚がなかつたじゃないですか。ただ庭の木
と同じ感覚。なくなつて大切さがわかるよう
な。具合が悪くなつてはじめて気づくつて感
じかな。あのときちゃんとやつとけばよかつ
たなつて。そうすればこんなにならなかつた
なあつていう後悔の念しかなかつたですな」。
調子がおかしいと思つたら、あつという間に
葉や幹の色が悪くなり、葉がでなくなつてし
まつたそう。

ヤブツバキが枯れはじめたことで、その後
の処置をどうするか、家族内での話し合いが
おこなわれた。ヤブツバキの再生にかけるか、
伐採するか。再生を選ぶと今までの維持費用
に加え、さらにお金もかかる。1回の治療で
何十万円とかかることもしばしばだという。

かね子さんは「私、もともとこの木を切つ
てくれていったの。お金がかかりすぎる
からつて。だけとお婿さん（和枝さん）のご主



伐採された枝の断面のようす。薬剤が塗られている
(2019年4月8日)

人)が、『私は(養子に)入った人間だから、先祖のものは私が守っていかなきや申し訳ないって。私ができる限りのお金をかけます』って。それは申し訳ないと思ってるけど、婿さんが私に『おばあちゃん、守っていくのが当たり前だ』ってやってってくれるからね、感謝してる。』

こうして藤江さん・馬木さんご一家と数年前からヤブツバキの担当となり、保護に尽力している都留市教育委員会の森屋雅幸さん(36)、樹木を守る専門の技術者である、樹木医の川村晃一さん(49)が力を合わせ、ヤブツバキの再生に踏みだした。

ヤブツバキの未来



川村先生によると、現在生きている部分は元の大きさの4分の1から5分の1ほど。ヤブツバキ再生の当面の目標は、これ以上枯れさせず現状を維持することだという。そのためにおこなっていることが、ヤブツバキの根本の土壌改良だそう。ヤブツバキの現状を見て、ヤブツバキにとって必要な肥料を入れていくのだそう。土壌改良が進んでいくと、早くて3、4年後に、ヤブツバキの樹勢が回復していくという。「ツバキが吹きかえす可能性はある」と川村先生はおっしゃっていた。和江さんも「こつち(ヤブツバキ)がね頑張っている限りは、続けていかなきやだなって思っています。こつちが枯れたらあきらめなきやなんだけど。とりあえず咲いている限りは。切るわけにいかないですしね。せつかくですしね、頑張っているから」という。ヤブツバキになんとか回復してもらいたいと願う気持ちや表情が、話している言葉から伝わってくる。ヤブツバキの樹皮のなかから新しい幹の皮が見えて、「頑張っているから」という言葉が身をもって理解できた。

お話を聞き終わり帰ろうとしたときに、リビングルームの窓から風に揺れるヤブツバキの木を眺めることができることに気づいた。窓のフレームと相まって、ヤブツバキの大きな絵画のように見える。きつと家族でご飯を食べながら眺めていたこともあるだろう。いつもその場にあるからこそ、そこにあるのが当たり前だと思うことは多い。お話を聞きながら、私も当たり前だと思っていたことがたくさんあると思いついてきた。ずつとかたちが変わらないとは限らない。たとえば、もののかたちや家族のかたち。ときには突然かたちが変わってしまったり、見えなくなってしまうことがある。だからこそあらためて向きあつたときにそのものの大切さを認識し直し、新たな魅力を見つけることがあるのだろう。色にひかれてヤブツバキを調べると、思ってもみない発見がたくさんあった。私は、変わっていくことのかなにも今あるものの大切さを身をもって感じられるものがあることを、このヤブツバキから学んだ。



特集「いろどる」をとおして

私たちは都留のまちを、色を探していつもよりゆっくり、
ときに立ち止まりながら歩いてみました。色とりどりの生
きものたちが目にうつり、たくさんの生きものがまちに彩
りを与えていることがわかります。

そんな、生きものが持つ色の先にはたくさんの発見があり
ました。



今まで知らなかった色。

手入れをして守っている人。

まわりの環境を知るきっかけ。

みる人を元気づけていること。

知ることが増えるたびに、生きものと私たちの距離は近く
なっけていきました。

今では、色の先にある人の想いや生きものたちの生きかた
を想像しながら歩いていきます。あたりまえに歩いていた通
学路も、買い物までの道のりも、いつもより色鮮やかにみ
えるようになりました。

桜の祠の 記憶を辿る

(2019年4月19日)

川棚地区にひときわ目立つ桜がある。木の下には祠があり、誰が置いたのか、きれいな状態の湯飲みとお皿があった。草をかきわけて入るような道の先に、誰がどんな思いでお参りに来ているのか知りたくなった。

4月19日、祠を探しに行く。十日市場地区にある柄杓流橋から川棚地区に向かっていると「都留グリーンゴルフ」がある。その駐車場に入って左手の奥に見える草むらに、2本の桜が立っている。草むらをかきわけていくと、岩でできた祠がひっそりとたたずんでいた。屋根の部分が大きくつくられており、なかをのぞくと空っぽだ。祠の前には湯飲みとお皿があり、枯葉がかぶさっていたが汚れているようすもなく、つい最近置かれたもののように見えた。

「何百年も前からあるかも」

4月21日、祠の付近のことについて詳しい人に話を聞こうと、十日市場地区にある渡辺造園の渡辺定夫さん(75)のもとを訪ねた。渡辺さんは、50年以上前から十日市場地区で畑をさされていて、このあたりの地



まるで昨日の日のように、あの山は誰々のだったからと話してください。長いあいだこの地域で住んでいるからこそ引き出される記憶の多さに驚いた(2019年4月21日)

理にも詳しい。祠について聞いてみると、「何百年も前からあるかもしれないんだな」とおっしゃる。十日市場地区の中央高速道路側から柄杓流川を挟んだ山は、何十年前は山を切り開いて畑をしていた。その当時から祠の存在は知っていたという。何か祭事がおこなわれていたかとたずねると、「とくにそういうことはしてなかったんだ」と教えてくださる。続けて渡辺さんは「でもな、あの場所を管理しとつたのは耕吉ちゃんやただだわ。だから詳しいことは耕吉ちゃんに聞くといいかもだな」という。詳しく聞くと、祠のある山は中野耕吉さんという



祠は前から見るとその屋根の大きさがわかる。高さは70センチほどで、文字などは彫られていなかった(2019年4月19日)

かたが管理していたらしく、耕吉さんの奥さんもたびたび祠を訪れていたそう。

渡辺さんは、祠の話だけでなく、向かいの山はウサギがよく獲れたことや、民家が減ってスズメが減ったこと、**ご・と・ん・べ・え**(アズマヒキガエル)を昔は捕まえて食べてたけれどいまは少なくなったことなど、この地域の昔の記憶をたくさん話してくださった。渡辺さんの話から、この地域は今よりも生きものたちで賑やかだったのだろうと想像できた。「地元を知ってる人が少なくなってるだな」と少し声色を落として渡辺さんはおっしゃる。

中野耕吉さんのお宅へ

中野耕吉さんは85歳くらいのかたで、「最近はおばあさん(中野さんの奥さん)も歩いてるのを見なくなっただな。誰が管理してるんかわからんだわ」という。渡辺さんに、中野さんのお宅の場所を聞いて、じつさいにお話を聞いてみることにした。

4月24日、渡辺さんから聞いた場所を訪ねた。ベルを鳴らして出てこられたのは、息子さんのようだ。「中野耕吉さんはいらっしゃいますか」とたずねると、「もう亡くなりました」と返ってきた。思いもよらない返答に驚く。事情を説明して、「おばあさんはおられますか」とたずねると、「入院して、今はいません」とおっしゃる。予期せぬところで、祠の記憶を辿る道が途切れてしまった。渡辺さんの、地元を知っている人が少なくなっている、という言葉が思い出される。

私は、今ならまだ祠のことを知っている人がいるはずだと諦めきれず、過去の記録を探すことにした。本誌20号の「森で暮らす」という記事のなかで、十日市場地区で写真館を営まれている松島恵子さん(当時73歳)とそ

の息子さんの祐一さんが祠にお参りをしている写真が載っていた。当時からお参りをしてきたのなら、詳しいお話が聞けるかもしれない。この祠の役割や地元の人にとってどんな存在なのか、未知のものを探す気持ちでワクワクしてきた。

祠を知る人

5月16日、松島恵子さんが営まれていた写真館は十日市場地区から谷村地域へ移転し、スーパーマーケット「オギノ都留店」の敷地にあると聞いて訪れた。「松島さんはいらっしゃいますか」と聞くと、「私です」と松島祐一さんが出てこられた。事情を説明すると「今、母に連絡をとってみるから」といつてくださった。「今から来ていつてき」と祐一さん。お礼をいつて、松島恵子さんのお宅へ向かった。

お宅にうかがうと、松島恵子さん(88)は本を1冊用意して待っていてくださった。「いつてた祠の話が載ってるよ」と恵子さん。『十日市場小誌』(昭和60年発行)というその本には「おばあ神さん」とある。「みんなおばあ神さんって呼んでたけどね」と地域での呼

び名を教えてください。

祠のようすを思い出しながら本を読んでみる。本には次のようなエピソードが書いてあった。夏狩地区に市場が開かれたころ、風邪を治す神様としてうやまわれていた女性が住んでいた。その女性は、耳の遠いお茶好きだったので、お参りをする人が、大声で「おばあさんお茶をもってきたよ、風邪を治しておくれ」と頼むと不思議と風邪が治った。おばあさんが亡くなってから祠が建てられ、お茶を持って、祠の上を叩いて大声で頼めば生前と同様のご利益があったそうだ。

私は、祠について取材を始めたころ、もしかするとこの祠の名前しかわからないのでは



『十日市場小誌』は十日市場地区に住まわれていた中野八吾さんによって昭和60年に編まれたものだ。十日市場地区の歴史が274ページにわたって書かれている(2019年5月16日)

と不安になっていった。けれども想像したより

も詳しい伝承が残っていたのだ。やっと見つけた手がかりに、気持ちが高ぶっているのが自分でもわかる。

「昔はお弁当持って、おばさまのところへお花見に行ったりしたけどね、今はもう行ってないし、知ってる人もほとんどいないんじゃないかな」と恵子さん。さらに当時を思い出しながら、十日市場の昔のようすを語ってくださった。「十日市場というように、昔はここに織物の市がたつて、お蚕が現金収入(源)だったから、このあたりの家の半分以上は機を織っていたんだ。朝早くからほかの家から機を織る音が聞こえたら競うように



恵子さんがお花見に行ったという桜の木。子どものころにはなかったそうで、いつから植えられているかはわからない(2019年4月19日)

して織りはじめてた」とおっしゃる。

朝早くから織機の音が聞こえるようすや、渡辺さんに聞いた畑のある山や賑やかな自然のようすと一緒に思い描くと、十日市場地区の昔の生活が見えてきた気がした。

5月19日、風邪をひいていたわけではなかったけれど、あらためておば・神・さまを訪れた。置いてあった湯呑みを洗って、お茶をいれ、屋根を叩いてお参りをした。屋根を叩くのは、寝ている神様を起こすためのものかもしれない。屋根が大きいのは耳をあらわしていて、よく聞こえるようにということだろうか。と想像が膨らむ。桜の祠のことを知れば知るほど、謎が深まっていくのがおもしろい。

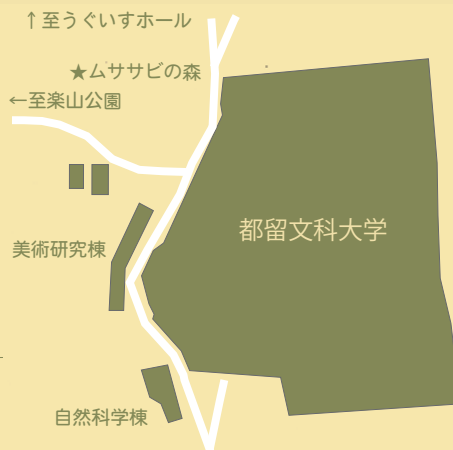
渡辺さんと松島さんのお二人とも、昔から語り継がれてきた伝承を知る人が少なくなっていることを教えてくれた。自分のほかに祠へ足を運ぶ人はいないかもしれない。そう思うと草に囲まれてひっそりと佇んでいるおばさまが、心なしか寂しそうに見えた。今だからこそ辿れる記憶の旅となった。

佐藤琢磨(社会学科4年) || 文・写真

センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、本学のキャンパスの森に赤外線センサーカメラ（赤外線を感じると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では5月から6月にかけて撮影された動物を紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



タヌキ (2019年5月15日 00:02)
撮影地: ムササビの森
木の実や昆虫などを食べる雑食性です。近年、本学キャンパスでも目撃例が増えています。

ネコ (2019年5月28日 19:39)
撮影地: ムササビの森
このネコは頻りにセンサーカメラに写り込みます。毛の色や模様で個体を識別できます。



ハクビシン (2019年6月1日 23:57)
撮影地: ムササビの森
ひたいから鼻にかけて白い帯があります。雑食性で果実を好みます。近年、ムササビの森でも記録されるようになりました。

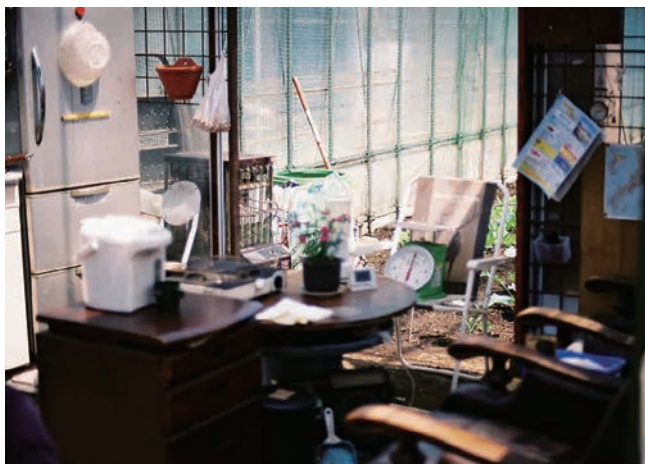
ふるもの 古物たちへの眼差し

都留市大幡^{おおはた}にお住まいの園田紀昭^{そのだのりあき}さん(79)は、粗大ゴミとして捨てられる物を集め修復している。それらが置かれた敷地は、ほかにはない特別な場所に見えた。興味を持った私は何度も足を運んだ。

江利そらむ(社会学科4年) || 文・写真



外から見たビニールハウス (2019年4月15日)



ビニールハウス内の休憩スペース (2019年4月28日)

不思議な場所の管理人

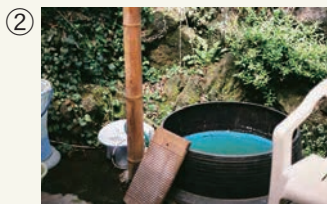
3月18日、本誌94号でお世話になった安田^{やすだ}圭一^{けいいち}さん(76)から「おもしろい人がいるよ」と紹介を受けて園田さんに会いに行った。園田さんは自宅近くに作った敷地を案内してくれた。娘さんの婿さんが解体業を営んでいることもあり、この場所には使われなくなった日用品や電化製品、農耕器具に至るまで何でも集まってくる。園田さんはそれらを修理して、パイプや古材を組み合わせて建てた小屋に収め、自ら使っている。修理された日用品や家電製品が並んだ空間を見ると「ただいま」と誰かが帰ってきそうな気がしてくる。私にはふだん使っている日用品が屋外に集うこの場所が特別な場所に見えた。

4月15日、あらためて園田さんにお話を聞きに行った。園田さんがよくいるというビニールハウスにおじゃまする。なかに入ると、空間の作りが一味違うように驚いた。細長いスペースは二つの空間に仕切られている。半分を畑が、もう半分を作業場と休憩スペースが占めていたのだ。休憩スペースには使い古されたソファやデスクスペース、家電製品

見取り図



① 6種類以上の果樹が並ぶ。年々、気温が上昇しているため、今まで育つことのなかった果樹も育つそう(2019年4月28日)



② 焼却炉の熱を利用して湯を沸かす露天風呂(2019年4月28日)



③ 自作のプレートが目を引き(2019年4月28日)

が置かれている。私には想像もできない使用かたをする園田さんを見て安田さんが「おもしろい人」と紹介してくれた理由がわかった気がした。園田さんは頭に浮かんだ構想を自分の手で形にしていくのだろう。一般の使いかたなんていうのは園田さんの頭のなかにはないのかもしれない。

一年中、暇がない

「物を作るということが好きでね。なんでも作る。自分で作りたいら。それが趣味だな」と、園田さんはいう。

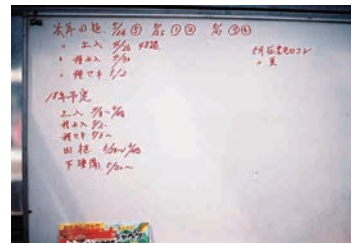
園田さんの家は代々、大工をしていた。その影響で園田さんも建築士を目指していたという。建築の学校へ通い、技術を身につけた園田さんは、木材を多く使った家から鉄を使った家までさまざまな家を作ってきた。敷地のなかに建つ小屋を作る技術は、このときに培ったものだと思うと納得がいく。32歳のころ、建築会社を辞めて富士急行株式会社に入社した。けれど、同じ時期にはじめた養鶏の仕事のほうが好きくて、42歳のころ富士急行株式会社を退社した。当時、敷地には7棟の養鶏場が建ち三万羽の鶏を飼育していたと



現在もトリ小屋を二つもつ。全部で19羽ほどの鶏がいる(2019年4月15日)



頭上にコンセントを掛けて耕運機を動かす(2019年4月28日)



今年植える野菜の予定が書いてある(2019年4月28日)



ハウス内にある園田さんの趣味スペース(2019年4月29日)



会社が倒産し修理が
できなくなったトラ
クター。修理は部品
集めからはじまる
(2019年4月15日)

いう。60歳を迎え夜の出荷作業が大変になつたため養鶏の仕事を終えた。その後、周辺に民家がなく騒音などの心配がないことと、建築の仕事よりも需要があることを考えて解体業をはじめたそうだ。園田さんが解体業を引退したのは10年前になるという。

「俺は運がいいっていうかな。自分が欲しいって思う物がやたら入ってくる。このハウスだつて、ただでもらつただよ。土地を返すときに邪魔になつたつていうおじさんから。こないだはな、トラクター直してくれて甥っ子が。いろいろいじつていたら直つたから誰かにあげようと思つて。なんかやたら入ってくるだよな。俺がとつとくからよ。あれ、みんな捨てちゃえばいいだけだね。みんな、ちよおつと手を加えれば直るじゃ。冷蔵庫庫なんてうちは買ったことないよ。」

物が集まつてくるのは焼却炉を持つているからではなくて、園田さんが物を修復することに自信を持っているからだろう。そう思うと園田さんのまわりに積まれている物たちが「直してほしい」と園田さんを頼つて集まつてきているように見えた。「みんな燃える物、燃えない物つて処分しちゃうわな。」



今日の予定が書かれた手帳。撮影した16時ごろには、線を引く項目はあと一つだった(2019年3月18日)

取つといたつてしようがないからな。でもな、ちよつと見てみたらなかの線が切れていたりそんなもんで、それをまた直すのが楽しみで。そうすればみんなタダでできるからな。だからぼつこのやつ(壊れた物)じゃないともらわないだな。直す用のない物はいらぬ。使える物は自分で使えつてな。だから、一年中暇がない。毎日やることあるから、楽しみだよ」。お話を聞いたその日も園田さんは朝4時に目がさめたそう。起きてすぐに、1日のうちにやることを手帳に書き込むそうだ。手帳を見せていただくと、土埃のついた紙にはその日やるのが簡条書きに並んでいる。文字の上には、一本いっぽん線が引かれていた。

向き合い続けて気づくこと

園田さんは思うように直せない物を前にしたとき、どうして機械が動かなくなったのか、機械を前に悩むそうだ。

たとえばこんなエピソードがある。お湯が沸かせなかったお風呂を直して欲しいと頼まれたときのこと。持ち主は、沸かすための機械が壊れてしまったと嘆いていたそう。園田さんが点検してみるとお湯を沸かすためのパイプ部分の入り口に、剥がさなければならぬ紙がついたままになっていることがわかった。人間の不注意によって沸かせなくなっていたとわかった当時のことを思い出しながら「機械は機械で、自分のやるべきことをしているだけなんだよな」とつぶやくように話す。機械は自分ができる最大限のことをやっていると園田さんは思っている。機械に寄り添うように向き合うことができるのはそのためだろう。私はお風呂を前にして、まるで事件を追いかける探偵のように頭を働かせる園田さんを想像した。壊れたと決め込む前に、なぜ動かないのかを考えると、機械が自分の意思を持って活動しているように見えてくる。私

は思わず、ふだん使っている家電に思いを馳せていた。

園田さんが作った敷地には、同じように修理好きな仲間が集まってくる。自分が何日もかけて直せずにいたものが、立ち寄った仲間の一言で直ってしまうということがあるそう。「やつぱり、一人つていうのはね、だめだな。年取ってくるるとき、頭が一つのこと集中しちゃうじゃん。そうするとよその人がきて、こういう格好にしたらいいじゃんつていつて。ああそうか、そうだなつて。そんな簡単なことが考えつかにゃあ。だから、そういうくだらにゃあ趣味の人が集まりゃあおもしろいだな」と、そのときのことを思い出すように話す園田さんは本当に楽しそうだ。

古物たちのテーマパーク

ガラクタとして集まってきたものを自分の手と頭を使って直してしまう園田さん。この場所は園田さんの手によって作られた古物たちのテーマパークのようだった。使われなくなった日用品や農機具が修復され、嬉しそうに私を迎えてくれる。再び使われるようになった物たちは、お店に並んだピカピカの

商品ではないけれど、この場所が自分の居場所だと誇らしそうにしている。園田さんはそれらを少し照れながら説明してくれる。どこからきて、直すときにどこが難しかったのか。機械に詳しくない私はただ相づちをうつことしかできない。けれど、電化製品と向き合うことが苦手な私だからこそ園田さんと敷地にある物たちとの関係が新鮮で特別に映るのだと気づいた。

園田さんは長年飼っている犬を見つめるように温かい眼差しで古物たちを見る。古物たちもそんな園田さんの眼差しに答えるように、本来の機能を回復していくのだろう。



敷地の外にも聞こえるほど大きな音で流れるラジオ。そばでは園田さんが作業をしていた(2019年4月28日)

養蚕業をつづける 後編

～技術を絶やさぬよう走り続ける機関車～

明治時代から郡内地方では、貴重な現金収入源として蚕が大事に育てられてきた。今でも養蚕業を営む水越薫夫さんに本誌 99 号に引き続きお話をうかがった。



絹糸けんしをつくる虫、蚕かい。正式にはカイコガという蛾の仲間で、成虫になる前に繭まゆをつくる昆虫だ。この繭を紡いで絹糸はできあがる。

地域のお年寄りは蚕のことを当たり前のように「お蚕さん」「おしらさん」などと呼ぶ。「さん」をつけて呼ぶほど大事にされていたのは、産業の少なかった郡内地方において、蚕が貴重な現金収入源だったからだ。郡内地方では古くから家の2階で育てられ、蚕を育てる家は養蚕農家ようさんのもうかと呼ばれていた。繭がたくさん取れるように願うお祭りが催されたり、蚕を供養する石碑が建立されたり。まちの人々にとつて養蚕は慣れ親しんだものだった。

しかし現在、都留市に養蚕農家はおらず、県内でも十数軒のみだという。そのなかのおひとり、大月市にお住まいの水越薫夫みずこしのかおさんは、84歳になる今でも3万匹の蚕を飼育している。

養蚕の仕事

水越家の庭にアルミハウスのようなものが建ててある。ここが、蚕が暮らす「蚕室さんしつ」という場所だ。なかには、蚕の餌となるクワがちりじりに置かれ、そのところどころに白く



左：蚕室のなか。ブルーシートで覆われた所に蚕が眠る 右上：蚕が眠る場所。白っぽく見えるものが蚕で緑色のものがクワ 右下：クワにつく蚕。葉の上にある白い粉状のものは石灰で、湿度が上がるのを防ぐため、乾燥材としてまかれる

てイモムシのような体つきをした蚕が見え隠れする。近づいてみると、目を凝らしてみなければわからないほどではあるがゆつくりと這い歩き、葉を食べていた。

養蚕の仕事といえば、餌を与えて、掃除をして……。私が思いつく世話といえばそれくらいだが、実際には餌となるクワを畑で栽培することから始まり、部屋の温度管理から、繭を取るための機械の設置など仕事は山積みだ。蚕が生まれてから繭を作るまでは約28日間。たったそれだけの期間内で、蚕は生まれたころに比べて約1万倍も体重が増えるという。成長にあわせてクワの量や蚕室の環境を変えなければならぬのだが、それだけ成長が早いとなれば一日ごとに仕事の内容は変わっていく。

「朝起きたら、3万匹のお蚕さんが腹が減って食べたと言ってると思えば、なんとか新鮮でうまいクワを食べさせてやるかな。考えることある(※)」と水越さんという。水越さんがもつとも気をつかうのは病気を防ぐこと。農薬がついたクワの葉を食べてしまえば、たちまち病気になって繭が取れなくなってしまううえに、一度病気になれば治ることがな

い。そのため、野菜畑に近いクワは農薬がついているかもしれないので取らないという。

また病気の原因は農薬だけではない。蚕室の温度や湿度は蚕の体に大きく影響するので、部屋の温度調整もこまめにおこなわれる。成長にあわせて、はじめは28度、次は25度、その次は22〜23度というように適した温度の環境を作る。たかが2、3度と思ってしまうが、この数度の違いが蚕の健康を大きく左右する。「まず健康でないと、いい繭作らない」と水越さんという。繭のなかには、重たいものから軽いもの、大きいものもあれば小さいものもある。その違いは蚕が過ごしやすい環境で育ったかどうかだ。よい環境で育った蚕はたくさんクワを食べて健康になり、長く均一な糸が取れるそうだ。

温度管理が大事とはいえ、水越さんの蚕室には温度計が吊り下がっているだけ。工場のような特別な設備があるわけではない。そのため水越さんは、蚕室のなかで木を燃やし温かい煙を蔓延させることで温度調整をしている。「ふつうのドラム缶に、大きい太い木を2本くらい入れとくの。そうするとそれがトコトコ」。それでも足りないときにはストー

(※)室温が最低17℃に達しない場合はクワを与えません

プを入れる。まるで赤ん坊を手塩にかけて育てるように蚕を育てていた。

屋外飼育への挑戦

4人兄弟の長男として生まれた水越さん。中学校を卒業後は高校にかよいながら家の田畑を耕した。終戦からまだ数年しか経たないころ、食べるものにも一苦労で好きになように生きかたを選択できる時代ではなかったという。奥さんのミチ子さんとの結婚後、お祖父さんの跡を継いで養蚕を始めた。

あるとき、お嫁に来たばかりで養蚕に慣れないミチ子さんが「家のなかでお蚕がクワを食べる音が気になって仕方ない」と水越さんに嘆く。当時の大月市では、伝統的に踏襲されてきた、自宅の2階で飼うという方法が一般的で、昼夜問わずザワザワと食べる音が聞こえていた。けれど当時の研究も徐々に進み、屋外で飼育する方法が現れ始めた。県の試験所にかよったり積極的に研修に参加したりしていた水越さん。ミチ子さんの一言をきっかけに、地域でいち早く「屋外飼育」を取り入れた。

「好奇心が強いだな。同じことをやってて

も、人よりも楽をしようとか、人よりも（よい繭を）多く取ろうとか。だから本も読む、本を読んだだけじゃダメだから、自分でも実際にやってみないとダメだし」。

水越さんの言葉のとおり、結果として300坪の畑を潰し3棟の大きな蚕室を外に建てることとなった。この方法は地域のほかの養蚕農家にとつても画期的な方法だった。2階にクワを運ぶのに苦労し、家のなかが狭くて寝るところを潰してまで蚕を飼っていた人々に、水越さんは屋外飼育の方法を教えるいく。「俺はこの技術教えませんが、なんていうわけがなく、みんなこのほうが繭が取れるよとか。養蚕家っていうのはみんなが同じ方向へ向いて、なるべくお互いが（繭を）取れるように」。



水越薫夫さん。わかりやすく言葉を
選びながら話してください

機関車だと思つて

「自分が機関車だと思つてたからね、この地域の」と水越さんは言う。先陣を切つてさまざまな手法に挑戦し、ときには人々に伝え牽引していく。まるで機関車のように奔走して地域の養蚕の道を切り拓いてきた。その原動力をうかがうと「好きだからつて言つたらいいのかもしれないけど、その反面には伝統だから、技術を絶やしたじゃ……」とおつしやつた。

伝統として続いてきたということは、そのなかに多くの人々の知恵が積み重ねられ、価値ある情報が詰まっているということ。一度途絶えてしまえばお金をいくら払つてもすぐには手に入れない。同じだけの人々の熱量や時間や労力がなければ得られないものと思うと途絶えてしまうことはどれだけもないことかと考えさせられる。

最後に、お蚕のことはもう考えきりましたか、と尋ねると「いやまだまだ」と即答した水越さん。今も現役で機関車を走らせている。

伊藤瑠依（社会学科4年）〓文

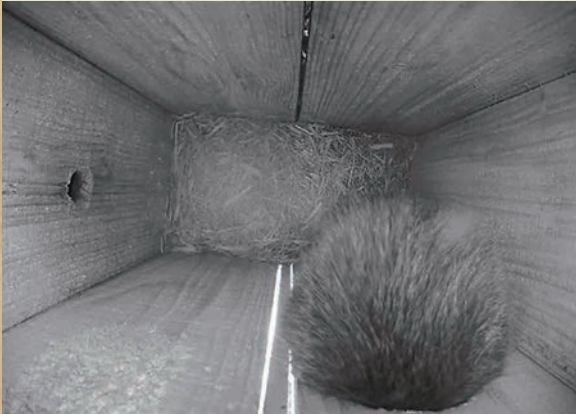
高橋未瑠来（本学卒業生）〓写真

水越薫夫さん〓写真提供

ムササビ 観察日記

- 6年目 -

4月24日 外を気にする



巣箱の外に顔をのぞかせています。昼間でもよく顔を出します。

2013年、本学の森にある二つの巣箱にムササビライブカメラを取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。昨年は3月末に子どもが生まれ、子育てのようすを観察できたのですが、今年の春は子どもの確認ができませんでした。今号では、4月と6月のムササビと、ライブカメラが設置してある森のようすなどを紹介します。みなさんも一緒にムササビを見守っていきましょう。

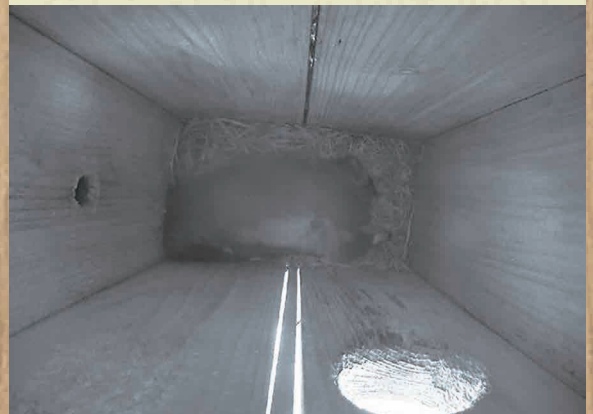
本学フィールド・ミュージアム=文・写真

6月5日 2匹で丸まる



体を仰向けにして寝ています。寝顔と足の裏をはっきり確認できます。

4月25日 体をのばしてお昼寝



片手を広げて寝ています。横顔をかすかに見ることができます。

コラム ムササビの森

ムササビライブカメラが設置されている巣箱は、本学美術研究棟横のムササビの森にあります。



ムササビの森には、スギやヒノキ、カラマツなどの針葉樹と、ケヤキやホオノキなどの広葉樹が混在しています。白丸で囲ったものがムササビの巣箱です。巣箱は地上4メートルほどの高さに設置しています。テンなどの捕食者が木を登るのを防ぐため、滑りやすいトタンを木の幹に巻いています。



ニホンジカのフンが落ちていました。この森に来ているようすがうかがえます。



この森のなかにはニホンジカがウバユリを食べた痕がたくさんありました。シカは植物の葉を口で引きちぎるように食べます。

写真はすべて2019年5月19日に撮影しました。



巣箱のなかに設置したカメラは、湿気やクモの巣などで映像が見えにくくなることもあるため、定期的にメンテナンスをおこなっています。

新しいふるさととの出会い



山の上から見た都留市街。疲れが吹き飛ぶほどの絶景だった（2019年5月10日）

都留市にかようようになって最初に驚いたことは、坂の多さと山の近さだった。

私が住んでいるのは、山梨県南アルプス市街。どこまでも田んぼが広がり、遠くには富士山と八ヶ岳が見渡せるようなひらけた場所だ。そんな地域に住み慣れた私は、都留市に来て衝撃を受けた。5分も歩けば息が上がっ

てしまうくらい急な坂道や城壁のように町を囲う山々が私の視界を覆う。同じ山梨県でもこんなに環境が違うのかと驚き、山が近いことに圧迫感を抱いたことを覚えている。

5月7日の午後のこと。大学周辺を散歩してみることになった。朝から降っていた雨がやみ、雲の隙間からはうつつすらと光が差し込んでいる。湿気を含んだ冷たい空気が、汗ばんだ肌ひんやりと心地よい。

ようやく慣れ始めた坂道を歩き、どつしりとたたずむ楽山をひたすら登っていく。十数分歩いて都留アルプスの稜線まで行つたとき、ふとまわりを見渡してみた。山々に守られているかのように、ミニチュアみたいな都留市街の景色が目の前に広がる。そこからは民家、高速道路、富士急行線と、都留の市街地が一望できた。山に囲まれ閉鎖的に感じていた街並みが一気にひらけ、心も晴れ上がった気がした。雨上がりの艶のある表情をした空と、それに彩りを加えるかのように連なる、鮮やかな緑の山々。その足元には、自然豊かな風景を邪魔しないようにひっそりと風情ある町が広がっている。まるで、自然と町が共存しているかのようだ。こんな景色に出会え

る都留市に来てよかつたと、心から思えた。

今、都留市にかようようになって数ヶ月が経つ。「平地」ではなく、「山の上」といういつものとは違った視点から坂や山を見つめることで、以前のように圧迫感を抱かなくなつた。登り続ければ都留市街を見渡すことができ、山が私たちを守ってくれているように感じる。たった一つの視点だけで都留市を見つめて思いを馳せるのではつまらないし、もつたいない。この体験を機に、そう思うようになった。

これからも自分にとって新たなふるさととなる都留市をいろいろな角度から見つめ、たくさんの表情を切り取つてみたい。慣れ親しんだ土地の環境とは異なるけれど、だからこそ新たな発見があるはずだ。

1日で二つの市を行き来する、実家通いの私だから見つけられる魅力がきつとある。一つひとつの気づきを大切にして、新しいふるさとでたくさんさんの思い出を残したい。

深沢有佳（比較文化学科1年）Ⅱ文・写真

都留の水が くれたもの



佐伯橋から見た田原の滝。ごおと大きな音を響かせていた（2019年6月11日）

都留市に来てから、歩く速さと目線が変わった。あたり一面に広がる植物や水流を少しも見逃すまいとゆっくり、ゆっくり歩く。幅1メートルほどの水路には、底が見えるほど澄んだ水が流れている。その側面には水に反射した光が、水面の動きにあわせて涼しげな模様を描く。またこの水路には思わず触れなくなるような水が流れている。水路を見たことがない私は、思わず足を止めて、しばらくのあいだじつくり眺めていた。

水路のまわりも少し湿っていて、ところどころに水が漏れ出しているのだろうかと探してみる。そうするうちに水路のまわりの植物たちに目がいく。一枚いちまいアイロンを当てたように花弁をピンと伸ばした大輪のタンポポの群生や、はじめましての野草が目に入る。都留の水は、たくさんを命を育んでいるようだ。

水路を気にするようになってから、身のまわりの「水」を以前よりも意識するようになった。何気なく水道水をコップにくんで飲むとしたときにふと気がつく。私の地元では安全を考慮して蛇口からそのまま飲むことはな

い。けれどここに来てからはそんな心配はしなくなり、今ではお風呂上がりの水一杯を毎晩の楽しみにするほど安心して水道水を口にしようになっている。

「水」への関心はどんどん高まっていく。田原の滝を知り、いてもたってもいられなくてそこを訪れてみる。自分の住む地区に滝があるなんて、思わぬ贈りものを受け取った気分だ。曇り空が似合う荒々しい岩肌を削り取るように、白く細い縄の束のような水が豪快に流れていく。その壮観さにしばらく鳥肌がおさまらなかった。

都留の水は、スケッチしたくなる植物やそのまま飲める水道水、写真でしか見たことのないような滝などたくさんの贈りものをくれる。しかしそれだけではなかった。当たり前のようにまわりにあるものをもう一度じっくり見つめ直すきっかけをくれた。そして、自分これまで生きてきたなかでの水の認識はどの地域でも通ずるものではないということを知ることができた。都留ならではの自然に感謝しながら、新たな気づきを自分なりに消化し、視野を広げていきたい。

田中麻奈（国文学科1年） 文・写真



本学うら山(2019年6月26日)

都留の 風景 写真集

—薫風の候—

目にうつる景色に鮮やかな緑が増え、
半そでで外を歩きたい季節になってきました。

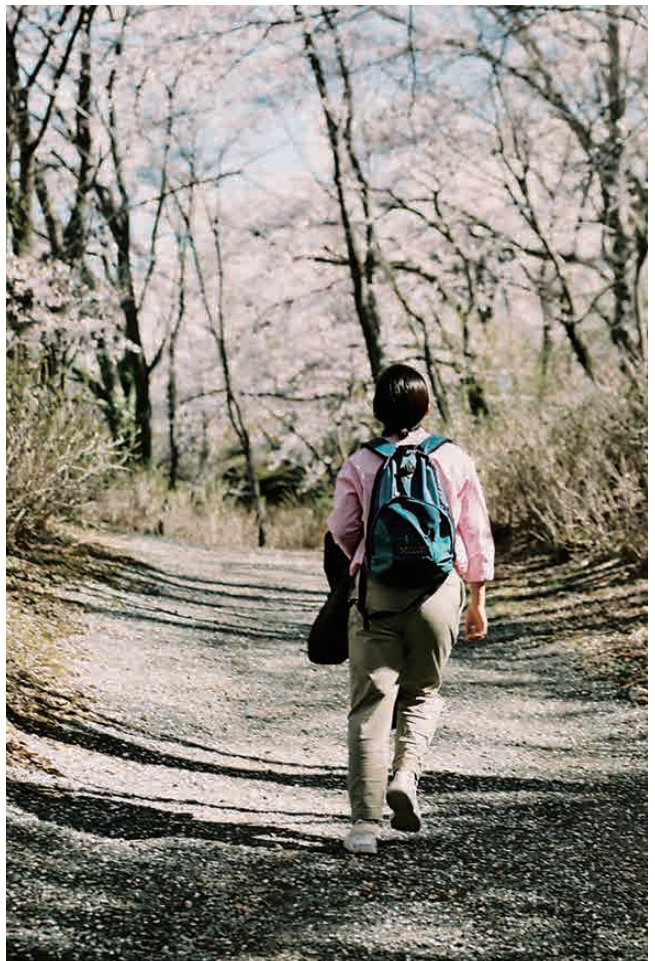
1台のフィルムカメラを持って、
今回は本学のうら山をたくさん歩きました。

春の終わりから夏の始まりにかけて、
わたしが見た風景をここに記録します。

高橋光(比較文化学科4年)=文・写真



本学うら山(2019年6月26日)



本学うら山(2019年4月9日)



本学うら山 (2019年4月9日)

フィールド暦

だんだんと日差しが強くなり、頬をなでる風も一段と心地よく感じられるようになりました。この季節の生きものたちは、どのように過ごしているのでしょうか。今号では4月から5月にかけて出会った生きものを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム 文・写真



ヒトリシズカ

北海道、本州、四国、九州に分布します。群生することが多く、都留市では林内や林縁で見ることができます。

撮影日…4月14日

撮影場所…本学うら山



フデリンドウ

本学のキャンパス周辺でよく見かけるようになりました。4月から5月にかけて花をつけます。花は日が当たっていると開きます。

撮影日…4月20日

撮影場所…本学キャンパス



イソヒヨドリ

名前のとおり、海岸や磯部に多く見られます。近年、都市部にも分布するようになり本学周辺には2014年ごろから見られるようになりました。

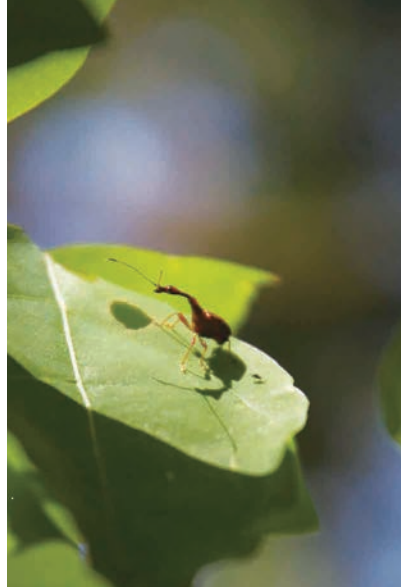
撮影日…5月3日

撮影場所…本学キャンパス



ウスバシロ チョウ

毎年、5月ころからキャンパス周辺の草地でよく見かけます。幼虫は、ムラサキケマンの葉を食べて育ちます。
撮影日…5月17日
撮影場所…本学キャンパス



ヒゲナガ オトシブリ

アブラチャンの葉の上で見つけました。オスはメスに比べて頭部がとてつもなく長いのが特徴です。
撮影日…5月17日
撮影場所…本学キャンパス



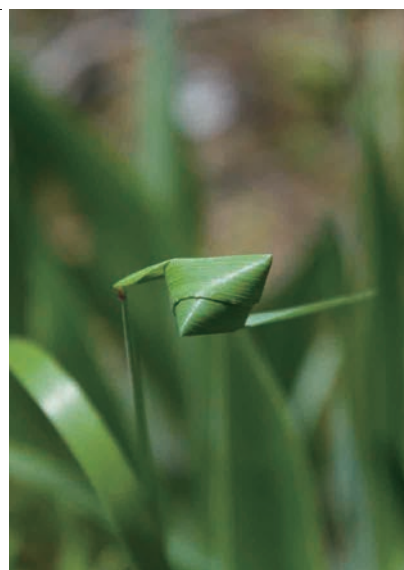
オオミズアオ

大型で薄緑色の翅をもつガです。都留市では4月から8月ころにかけて見られます。さなぎで越冬します。幼虫はサクラヤクリなどの葉を食べます。
撮影日…5月17日
撮影場所…古川渡



ユキノシタ

都留市では十日市場の湧水地や水路など湿った岩場で多く見られます。5月から7月にかけて多数の花をつけるのが特徴です。
撮影日…5月19日
撮影場所…十日市場



カバキ コマチ グモの巣

おもにススキの葉を巻いた巣をつくります。カバキコマチグモは毒性が強く、ヒトが噛まれると痛みます。
撮影日…5月17日
撮影場所…本学キャンパス



バイカモ

都留市では十日市場の湧水地など限られた場所に分布しています。花期は長く、11月ころまで花を見ることが出来ます。
撮影日…5月19日
撮影場所…十日市場

FIELD NOTE

no. 101 Jul.

発行人

北垣憲仁 (38-39,44-45)

統括編集者

西教生 (16-17)

編集長

平岡摩梨菜 (4-5,18-19,46)

宇佐美温加 (13-15,24-25,46-47)

副編集長

風間悠花 (8-9,29,38-39)

小林史佳 (20-23,44-45)

豊増華歩 (2-3,6-7,10-12)

編集

伊藤瑠依 (35-37)

小俣溪和 (4-5,38-39)

江利そらむ (1, 18-19,30-34,46,48)

小泉篤広 (18-19)

佐藤琢磨 (18-19,26-28)

杉浦茜 (4-5,16-17,18-19,46)

高橋光 (18-19,42-43)

田中麻奈 (41)

深沢有佳 (40)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE no.101

発行日：2019年7月10日

発行部数：2700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので、気軽にいらしてください。

—— 編集後記 ——

高校時代の 失敗談



赤

い自転車に乗ってときどき母が学校まで来てくれていました。なぜならわたしがお弁当を忘れたからです。朝ぼ一つとしていて、お弁当を台所に忘れたまま学校に向かってしまう日が何日かありました。そんなときは決まって、「ごめんなさい。お弁当を忘れた！」と母に連絡。当時お弁当屋さんで働いていた母はそこで作ったお弁当を持って自転車を走らせてくれました。今ふりかえっても頭が上がりません。

(平岡摩梨菜)

ら

つきー。まだ間に合う。そう思った矢先のことでした。スッテーン。思い切り足を滑らせます。友達と通るたび、すり足で歩いたほど、よく滑る渡り廊下での出来事です。授業開始の前だったこともあり、あたりには誰もいませんでした。かっこ悪い姿を見られることはつらいですが、まったく誰にも見られず何事もなかったように教室に向かわなければならぬのはもっとつらいことだと気がつきました。

(江利そらむ)

む

かいのホームから電車が出発しました。いっぽうこちらのホームには、乗る予定の電車がなかなか到着しません。スマートフォンの乗り換え案内アプリと終始にらめっこ。そのあとも電車を1本見送ってから気がつきました。「あ、ここ反対方向のホームだ」。高校生のころ、私は一人でもともに電車に乗れませんでした。間違いに気づいたあと、平静を装いながら正しいホームへと歩を進めました。今では乗り換え案内アプリを片手にではありますが、少なくともホームを間違えることはありません。多分。

(杉浦茜)



次回予告

つくる人、うけとる人 (仮)

2019年9月発行予定

詩に魅せられて

都留市を舞台にした詩に出会い、詩人が描く都留を見つけたく
なりました。詩の余韻を抱えながらまちを歩くと、この景色に
また1歩近づけたような気がします。

坂の道

六つ違いの弟が
好物のホッケの開きを買に行った魚屋
口に余る大玉の飴を買った駄菓子屋
母の商う店は量り売りの醤油や味噌
こぼさないよう間違わないよう
手伝いは真剣だった
肉屋 米屋 荒物屋
呉服屋 籠屋 プリキ屋
日々の生活が事足りていた
二百メートルの緩い坂の道
橋の上に丸太が並んでいた経木屋
一枚一枚吊るして干して
おばさんの見事な手さばきで
五十枚ずつ束ねられていった
目立て屋にはいつも火の前に
怖い顔をした洋子ちゃんのおじさんがいた
小さな池があった小さなホテル
「大木実」流行歌手が泊まって大騒ぎになった
何でもあった坂の道

路地の奥には農耕馬が二頭
妹はまわらぬ舌でひひーんと啼いた
年寄りの夫婦が夏だけ開いたかき氷屋
共同水道が一つ
見知った人たちが
いきいきと立ち働いていた
父と母も甲斐甲斐しかった
弁天さんを大切に祀った坂の町
わたしは一軒一軒をのぞいて歩いた
二百メートルが世界の全てだった

長い長い坂の道が
今は玄関を閉ざして何もない
短くなった道に
夕日が長々と伸びている

詩=せきぐちさちえ
1942年山梨県都留市生まれ。自称「谷村っ
子」。都留詩友会の会員として、これまでに
3冊の詩集を出版する

写真=江利そらむ(社会学科4年)



写真に映るこの通りは弁天町です。5月17
日せきぐちさんとともにこの通りを歩きま
した。通りには詩に登場するお店が立ち並
んでいたといいます